

映える！

描かれたお国自慢

今月の小展示では、
県内各地の近代の様子が描かれた「チラシ」「広告」「絵図」「案内書」などを集めてみました。

登場する資料に描き込まれた、地域イチオシの「お国自慢スポット」。
「ようこそ！」「おいでませ！」のオーラが満ちあふれています。

「地域資産」とか「地域創生」とか、
今日風のテクニカルタームにまとわれた地域振興の戦略がちらついたりもしますが、
まずは、「愉快 きれい わかりやすい」
目の前に繰り広げられるカラフルな世界をひたすらさまよってみることにしましょう。
図柄や鮮やかな色づかいに、思わず「いいね！」。

リアリティで言えば「写真」に軍配があがってしまうのかもしれませんが、
描かれたもののもつポテンシャルをくみ取ったり、
そこに秘められた何かしらのメッセージを想像力たくましく読み解いてみるのもまた一興。

楽しくてきれいな「映える」世界の中に、しばし身をゆだねてみませんか。

■描かれた錦帯橋と義済堂（明治15年）

〈県史編纂所史料895〉



A「錦帯橋の広告」一度は御覧遊ばせ錦帯橋を

〈一般郷土史料B170〉

県内有数の美林として激賞されていた城山の山ふところ、錦川（岩国川）にかけられた錦帯橋が描かれています。どことなく近世の物見遊山の雰囲気漂わせています。

主役の錦帯橋に注目すると、几帳面に築き上げられた橋脚（水流に鋭く向けられた水切りも描かれています）に支えられた木造アーチの優美なフォルムが目飛び込んできます。

桜と紅葉をモチーフにした「ふきだし」に、「山水明眉」「風光絶佳」のフレーズが踊ります。

“日本のエジソン”と呼ばれた藤岡市助が創設した岩国電気軌道株式会社作成の広告。

岩国電気軌道は、明治42年（1909）、山陽本線岩国駅と錦帯橋近くの新町駅を結んで開業。

中国地方では最初の路面電車でした。

電車会社の広告なので、強調されているのはその利便性。

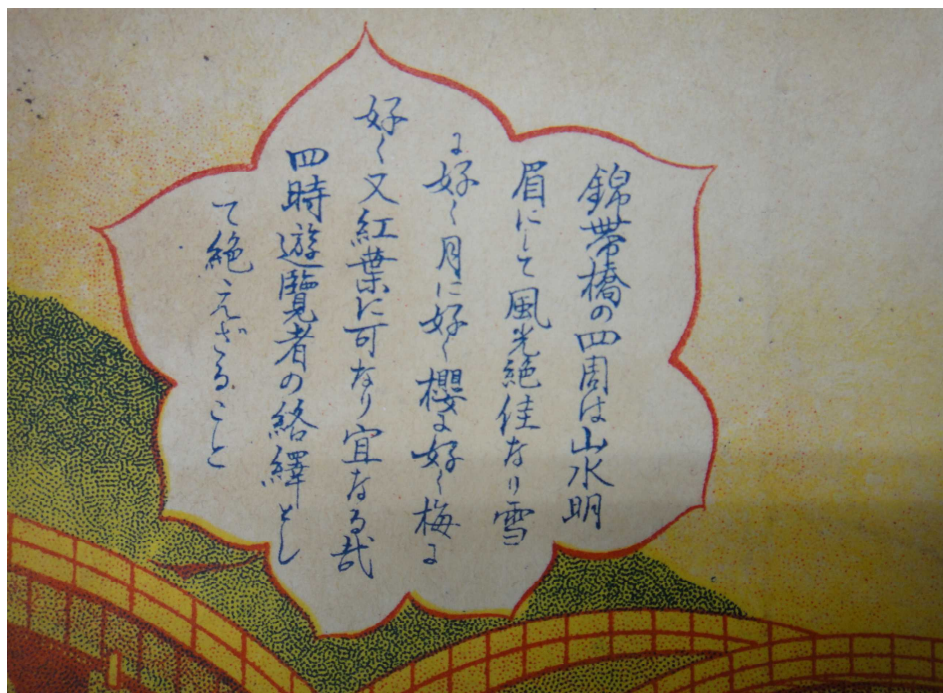
岩国駅で山陽本線から乗り換えると、15分で錦帯橋の佳景を堪能できること、

山陽本線宮島駅〈昭和17年、宮島口に改称〉から岩国駅まではわずか30分であること、

安芸宮島と一体をなす景勝地であることが、強調されています。

この広告はいつ作られたものでしょうか。

少なくとも、軌道会社創設の明治42年以降の製作であることは確定ですが・・・・・・。



この広告には描かれていませんが、実は錦帯橋の高欄の親柱には擬宝珠〈ぎぼし〉が取り付けられていた時期がありました。大正8年（1919）の橋板張り替え時、大論争ののち、橋の格式を高めるために擬宝珠が取り付けられることになったのです。当代きっての建築デザイナー・名古屋高等工業学校長武田五一が意匠設計をゆだねられ、地元の彫金家正兼長雲が製作にあたりましたが、昭和25年（1950）のキジア台風で流失（流失を免れたものが岩国徴古館に展示されています）。つまり、この広告に描かれているのは、「明治42年以降、大正8年以前」の錦帯橋の姿なのです。

軌道開業と時を同じくして、岩国で錦帯橋保勝会が設立されます。

保勝会は、風致の維持と観光客誘致のために、明治以降、全国の景勝地で組織されたものです。

保勝会による集客戦略の一環で、軌道会社設立と同時に作成された広告なのかもしれません。（裏面には何も印刷されていません）。

B 「岩国町名所図絵」

〈山口市雨村家文書65〉

金子常光画／日本名所図絵社調製

大正末から昭和のヒトケタ代に大ブームとなった「初三郎式鳥瞰図」のひとつです。

岩国電気軌道製作の「錦帯橋の広告」【資料A】と比べてみると、いっそうきらびやか、全体的に明るい色調であてやかなに整っています。

吉田初三郎（明治17年－昭和30年）の描く鳥瞰図は、クライアントの要請をうけたのちに、緻密な現地調査をふまえて制作されました。その特徴は、主役をひきたたせる大胆なデフォルメを用いたアクロバティックな構図にありました。見えるはずのない東京や富士山、さらには海の向こうの樺太や朝鮮が絵図上に表示されることがしばしばでした。初三郎の下絵をもとに、最終的には工房所属の絵師により、浮世絵的な色彩にまとわれて、「楽しく美しくわかりやすい」「でかけてみたくなる」作品が次々と生み出されていったのです。

金子常光は、吉田初三郎のプロダクション（大正名所図会社〈のち観光社に改称〉）所属の絵師でしたが、大正11年（1922）に、大正名所図会社の経営スタッフであった小山吉三が「日本名所絵図会社」を設立すると、初三郎と袂を分かって同社に合流したのです。

当然のことながら、両者の作風は似通っています。常光は、初三郎にとっての「商売がたき」であり「最大のライバル」になってしまったのです。

鉄路延伸の時流に乗った旅行ブームの招来に大きな役割を果たした鳥瞰図でしたが、戦時色に染まる時代の訪れとともに、軍事的な事情から、作品制作もストップせざるを得なくなり、時代を彩る華やかな千両役者であった鳥瞰図絵師は長くその存在を忘れ去られてしまうことになりました。

初三郎や常光以外にも何人かの鳥瞰図絵師の作品を確認できるのですが、金子常光については、その生没年も現時点では不明、謎多き鳥瞰図絵師です。ちなみに、長く初三郎の工房を支えていた鳥瞰図絵師の一人として柳井新庄出身の前田虹映（昭和20年没）が知られています。

展示に目を転じて見ましょう。

この鳥瞰図は、展開したかたちで全体を俯瞰することになるのですが、左端の通信欄にメッセージを記入して、折りたたんで、切手を貼り付けて、封緘葉書として投函できるようになっています（古い話で恐縮ですが、観光みやげとして一世を風靡した観光地の絵はがきも、収納ケースを裏返して折りたたんで切手を貼り付ければ郵送できるようになっていました）。

錦帯橋や吉香公園などの景勝地だけを強調するのではなく、軒が連なる錦帯橋東側（岩国）の町場にぎわい、椎尾神社から臥龍橋に至る都市の軸線、役場・岩国座・図書館・税務署などの公共施設、麻里布駅東側の帝国人造絹糸岩国工場など、近代都市として「伸びゆく岩国」のさまざまな要素が紹介されています。この鳥瞰図は岩国町の発注によるものと思われます。

次に製作年を推理してみましょう。

① 帝人岩国工場創業・・・昭和2年（1927）、② 麻里布駅の変遷（駅名のうつりかわり・・・明治30年（1897）岩国駅開業→昭和4年麻里布駅改称（岩徳線岩国駅〈現西岩国駅〉開業））、③ 岩国電気軌道廃止・・・昭和3年、④ 町役場がある（岩国市制は昭和15年）
ということは、図絵の製作年は「昭和4年以降、昭和15年以前」ということになります。

この鳥瞰図でひたすら「映える」のが、錦帯橋下流部に描かれた臥龍橋です。

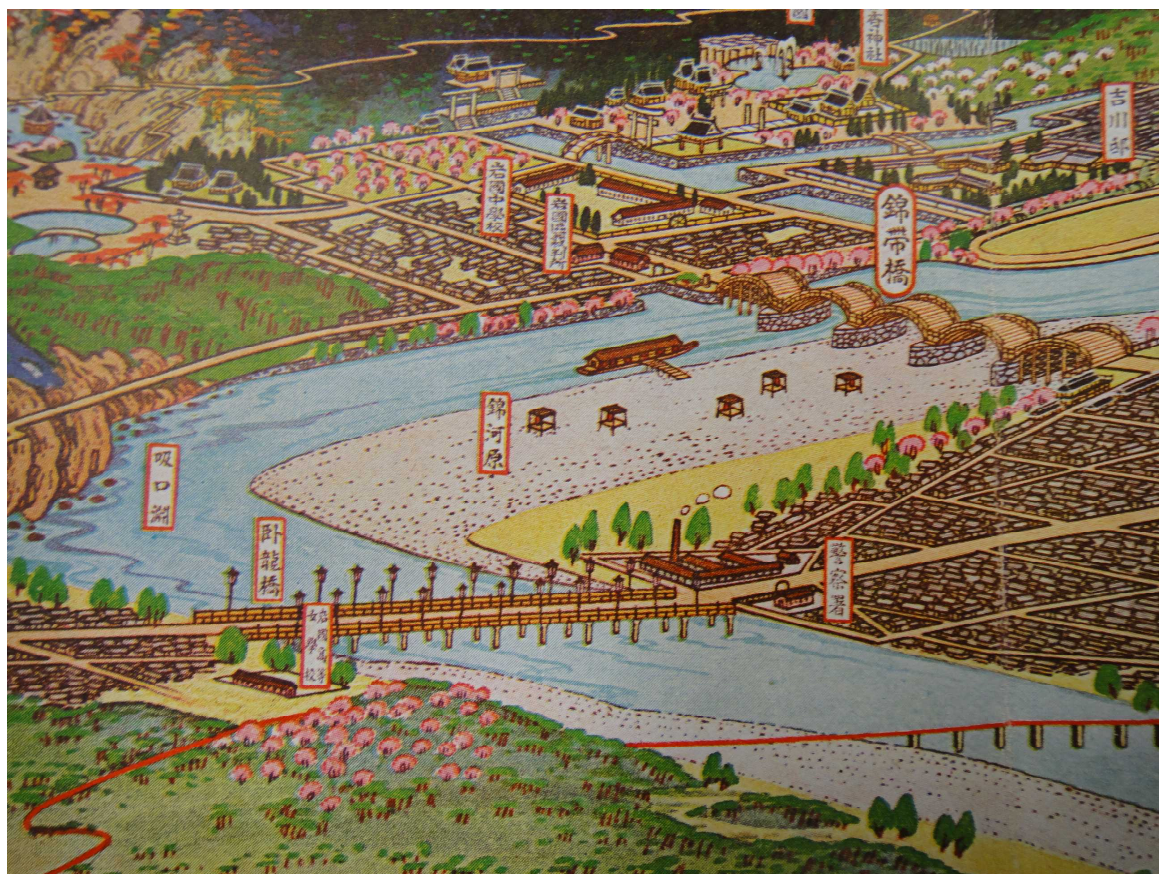
大正6年（1917）開通のこの橋の高欄には春日灯籠が描かれています。橋桁や高欄の形状からは木造橋のように見えますが、臥龍橋は、当時の県土木技師原田碧が設計した和風コンクリート橋です。

臥龍橋架橋は当時全国的にも注目を集めていた工事で、大正7年2月発行の工学会（現土木学会）の機関誌「工学会誌」第37輯414巻に「－論説及報告－ 山口県岩国錦川筋臥龍橋架設工事報告」としてその詳細が紹介されています（執筆者は原田碧、本文30ページ・図面5葉）。それによると、岩国の「佳良なる山水風景と雅趣」を尊重して、和風の意匠設計を武田五一にリクエストしたことがわかります。「檜造りの擬宝珠欄干」「春日燈籠」を取り付けたことも記録されています。

橋の東側（左岸）もと、北側には義済堂が、南側には警察署が描かれています。

武田五一意匠設計の和風コンクリート橋としては、鳥取県三朝温泉の「三朝橋」〈昭和9年、国登録有形文化財〉が知られています。

■描かれた錦帯橋と臥龍橋（昭和初期）



■撮された臥龍橋（昭和14年） 〈「錦川改良工事誌」一般郷土史料B505〉



C 「西日本保勝会設立趣意書」(昭和11年4月)

〈一般郷土史料B143〉

大見得を切る仁王像のユーモラスな姿がインパクト大。

昭和11年(1936)4月に長門鉄道の関係者を中心に設立された「西日本保勝会」の設立記念座談会の広告、吉田川(小屋川)に沿った長門鉄道沿線の観光振興のための総決起集会の開催通知です。

大正3年(1914)に長門軽便鉄道として設立され、大正7年に小月・西市間で開業した長門鉄道沿線の「みどころ(観光資源)」がところせましと描かれています。「海峡絶景」の地・下関と「鮮満対景」の地・萩を一体の観光地としてまきこんで、各地のイチオシの風景が紹介されています。それぞれの絵柄には大げさなデフォルメは見られず、どちらかといえば写実的ですが、地域資産としての価値を昇華させようとする情熱を感じ取ることができる資料と言えます。

景勝地・史跡(東行庵・霊峰華山・石柱溪・大寧寺・青海島など)の紹介に加えて、「青松白砂」の浜辺、「月景色」に彩られた古刹、「滝」「淵」などのビューポイントの数々、さらには、「船遊び」「潮干狩」「川船遊び」「蛸狩り」「鮎狩り」「松茸狩り」など、自然のなかに人々を誘導する数々のしかけが紹介されています。

「躍進途上観光資源開発」のスローガンや、「皇紀二千六百年奉祝記念大事業」という会議名称に、時代の雰囲気の色濃く投影されています。

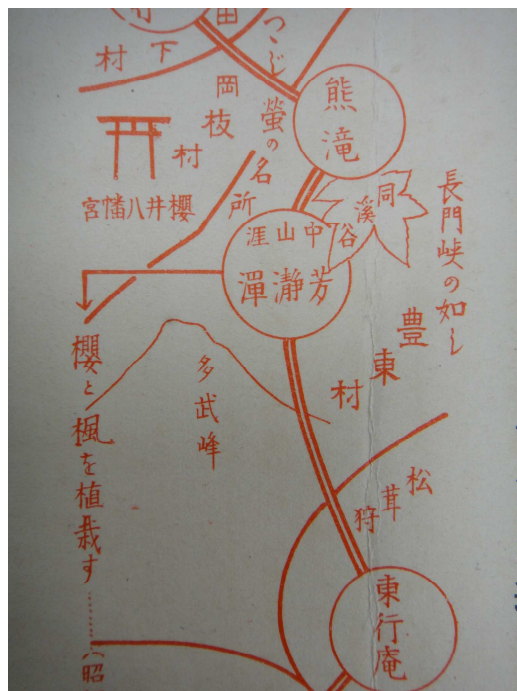
注目されるのは、座談会への参加費を桜や楓の苗木の購入経費に充てようとしていることです。成功モデルとして、「東京荒川の桜堤」や「京都高尾の紅葉」が紹介されています。裏面には県内の成功事例として、「萩・阿武川の桜土手」「宇部・常盤池の桜」が紹介されています。

広告裏面には、「設立趣意書」「これまでの観光振興のあゆみ」「今後の展望」などが印刷されています。鉄道旅行を軸に展開された、戦前の観光開発のノウハウが集約されています。

〔西日本保勝会設立趣意書〕(抄出)

○山水の地は偉人を生む○防長の地到る処勝景○維新以来俊傑相次いで出で○郷朋の名声天下を風靡す○国土の清徴を唱歌ふる○我国の西門に当って一大公園を画する○吉田川は西日本枢要の関門に位し国道幹線に伍し交通至便○近郊稀に見る天恵にして山紫水明○景の変化に富む○規模雄大○閑雅幽翠○下関萩路線○瀬戸内海から日本海に通ずる○維新の策源地○名所古跡温泉等を抱容○海山川淵大自然の恵み○春夏秋冬一年を通じて○文人墨客から男女老幼○一度来り遊ばば○羽化登仙○真価立所掬するを得る

ちなみに戦前期に設立された県内の保勝会としては、岩国保勝会・長門峡保勝会・仙崎青海島保勝会・秋吉瀧穴保勝会・須佐湾保勝会・石柱溪保勝会・八坂村保勝会(白石山)があります



D 「長府名勝案内」

大正14年11月15日下関要塞司令部認可

〈防府市御蘭生翁甫文庫431〉

（発行）長府町教育会代表者益本豊治郎

（印刷社）日本名所図会社

E 「下関長府名勝案内」

昭和6年6月23日下関要塞司令部検査済

〈山口市雨村家文書79〉

山陽電気軌道株式会社 （印行）日本名所図会社

F 「山陽電軌沿線案内」

昭和10年3月7日下関要塞司令部許可済

〈下関市豊浦／戸島家文書1（27の26）〉

（発行）山陽電気軌道株式会社／長府楽園地事務所／川棚温泉事務所

【資料D】【資料E】は、ともに日本名所図会社発行・鳥瞰図絵師金子常光の作品です。
どちらにも長府エリアが描かれています。

発行年が違いため、山陽電気軌道の開通部分が異なります。発行年が新しい「E」では、長府中心部の忌宮神社門前の鳥居前まで軌道が延伸しています。最終的には山陽本線長府駅まで開通、壇ノ浦－唐戸－東駅経由で山陰本線幡生駅までの区間で運行されます。長府から下関にいたる海岸部の路線は、明治期に山陽鉄道が計画した路線だったのですが、緊迫した国際情勢に影響されて、軍事上の理由で敷設が許可されませんでした。

【資料D】【資料E】を比べると、同じ鳥瞰図絵師の手になる作品でありながら、その雰囲気、色づかいがずいぶん異なる印象を受けます。発注者が違うため、それぞれの制作意図が反映されているのでしょう。

長府町教育会発注による鳥瞰図【資料D】は、色合いが少し沈み気味ですが、「しっとり」感が強く漂っていて、長府の歴史が織りなす「歴史自慢によるお国自慢」が風合い豊かに表現されているように思われます。桜花爛漫の功山寺・覚苑寺など華やかな場面もありますが、毛利邸、特別保護建造物功山寺仏殿、覚苑寺、境内地が豊浦宮跡地とされる忌宮神社など、長府の歴史的資産が画面中央にきまじめに描かれており、教材としての利用も意図して製作されたものと思われる。

海上に目を転じると、関門海峡や内海航路付近には大型船や汽船がひしめきあい、松原の続く長府沖合の瀬戸内海には帆船がのどかにたゆたう光景が描写されています。海上に投影された近代への染まり具合のちがいを読み取ることができるように思われます。

なお、周縁には釜山・ウラジオ・東京の地名も表示されていて、鳥瞰図の愉快的一面も失われてはいません。鳥瞰図絵師の面目躍如と言ったところでしょうか。裏面には長府の名所旧跡が写真とエピソードを交えて紹介されています。

山陽電気軌道発注による鳥瞰図【資料E】には、山陽電気軌道の沿線全域の様子が収録されています。バス路線も含めた沿線の名所旧跡について、その由緒や歴史性というよりよりも、観光名所としてスポットライトあてる指向が見え隠れします。

【資料D】との大きな違いは、その色調にあります。【資料D】の背景は落ち着いた色調でまとめられています。それに対して【資料E】は、明るく晴れやかにまとめられています。ひとつひとつの色彩は淡いのですが、全体のトーンとしては、あふれんばかりの活気やにぎわいが漂っています。住民の夢をかき立てる「近未来志向のお国自慢」が表現されていると言えるのではないのでしょうか。

【資料E】には、たくさんの「レジャースポット」を確認できます。

レジャースポットの誕生は、都市の近代化を象徴するできごとであり、近代都市の「お国自慢」には欠くことのできないアイテムでした。海水浴・汐干狩り・納涼夜釣り（「小門の夜焚き」）など、自然をそのまま利用したレジャー、苺園・植物園・遊園地（眺望を愛でる施設）など、自然を取り込んだレジャー、などです。競馬場や球場などの娯楽施設がつくられ始めていることがわかります。神社仏閣名所旧跡をめぐる「旧来の観光」から「新しい観光」への移行を読み取ることができます。

こうした指向は東京大阪近郊の私鉄の経営戦略が成功モデルとされました。

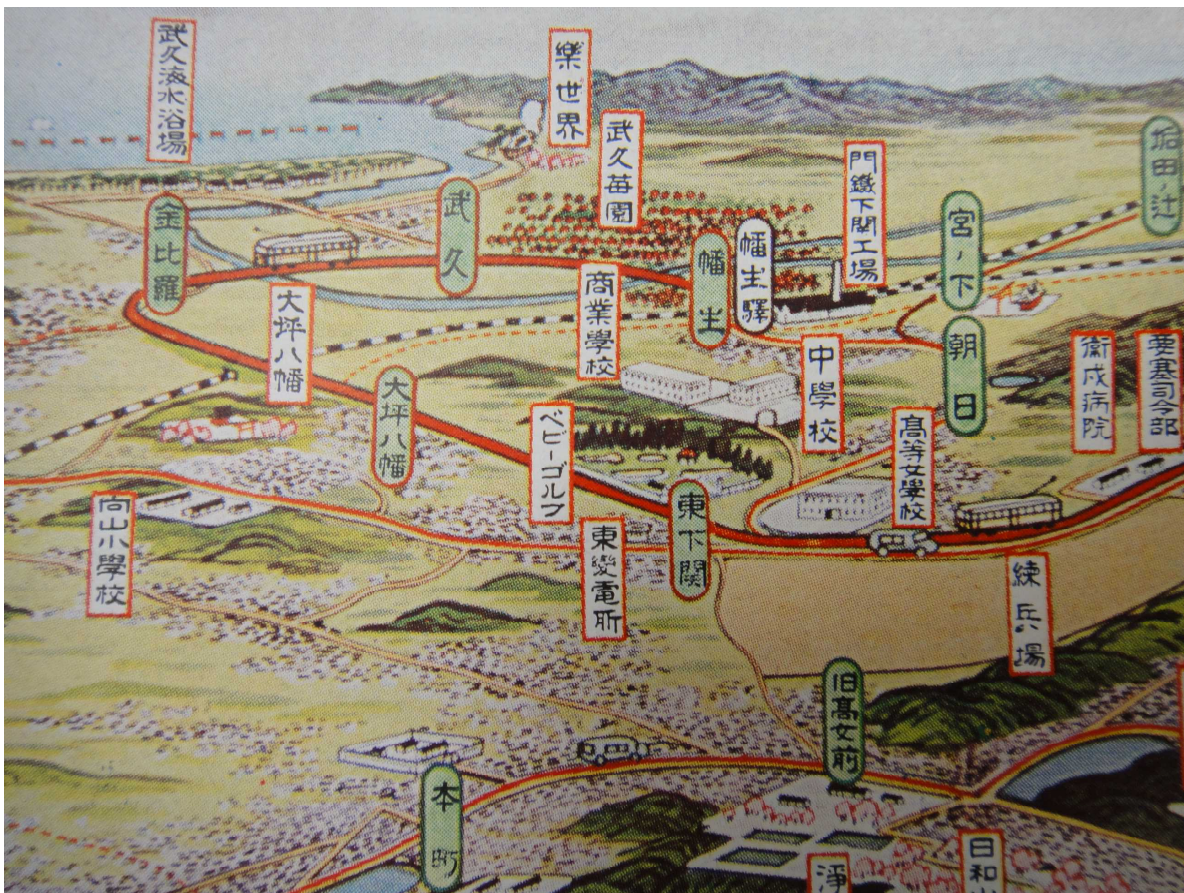
鉄道の延伸にあわせて、起点から少しばかり離れた場所に、温泉・海水浴場・登山道・動物園・植物園・遊園地を整備する手法です。阪急電車と宝塚歌劇団が典型的な事例です。

■長府名勝案内 金子常光画 大正14年 〈防府市御園生翁甫文庫431〉



■下関名勝案内 金子常光画 昭和6年 〈山口市雨村家文書79〉

「楽世界」「苺園」「ベビーゴルフ」・・・山陽電気軌道沿線の自慢のイッピン・・・新しい観光のかたち



下関を起点に、「レジャーの殿堂」である温泉地（川棚温泉）と遊園地（長府楽園地）を連絡していること、沿線が「海や桜」などの佳景をまとっていることが強調されています。

長府楽園地は、山陽電気軌道が昭和7年（1932）に開園した総合レジャーランドです。汐湯、遊戯施設（ローラースケート・ベビーゴルフ・電気自動車など）、劇場、食堂などが整備されていました。

「山電直営西日本スポーツの殿堂」として長府球場（昭和6年には大リーグ選抜チームとの日米野球が開催される）や長府競技場（連盟公認トラック）も隣接していました。お国自慢の「楽園の喧噪」は、「軍靴の響き」にかき消されるかたちで、昭和13年8月、軍需工場（神戸製鋼所）への売却によりその幕を閉じることになったのです。



